弘法大師の思想
―特に自受用身について―

渡辺新治

弘法大師が主張した思想の中で、法身説法と即身成仏は特に重要である。その中で法身説法は、法身が説法するという今までの仏教が説かなかった考えである。法身は四種法身というように自性身・受用身・変化身・等流身の四身が法身であるという考えである。唯識思想の中では法身の三相として、自性身・受用身・変化身が説かれ、また受用身の二種として自受用身・他受用身が説かれる。等流身は説かれないが、この唯識の法身の三相が基にあって、弘法大師が四種法身を提出したと思われる。その中で四種法身の法身が説法するという考えもあるが、弘法大師が特に法身説法という時、自性受用仏の説法を真言密教の特質としている。ここではその自受用身に焦点を当てて見ていこうとするものである。

一、『成唯識論』に説かれる法身の三相

弘法大師空海は『秘密曼荼羅十住心論』の第六他縁大乗心の中で、この第六の住心は法相宗に当たるとし、唯

識の思想が説かれる経論をもとにして述べられている。その中に『成唯識論』が引用され、この法身の三相が述べられている。そのところを見ると

此の牟尼尊の所得の二果は、永に二障を離れたれば、亦は法身と名づく。無量無辺の力と無畏との等き大功徳の法に荘厳せられたるが故に、体と依と聚との義をもって總じて説いて身と名づく。故に此の法身の五法を以て性と為す。浄法界をのみ獨り法身と名づくるには非ず。二転依の果をば皆是に摂するが故に。是の如くの法身に三相の別有り。一には自性身、謂く諸の如来の真浄の法界なり。受用と変化との平等の所依なり。大功徳の法の所依止なるが故に。二には受用身、此に二種有り。一には自受用、謂く諸の如来の三無数劫に無量の福慧の資糧を修集して起こしたまえる無辺の真実の功徳と及び極めて円かに浄き常遍の色身となり。相続・湛然として未来際を尽くして、恒に自ら広大の法楽を受用す。二には他受用、謂く諸の如来の平等智に由って示現したまえる微妙の浄功徳の身なり。純浄土に居して、十地に住せる諸の菩薩衆のために、大神通を現じ正法輪を転じて、衆の疑網を決して彼をして大乗の法楽を受用せしむ。此の二種を合して受用身と名づく。三に変化身、謂く諸の如来の成事智に由って変現したまえる無量の随類の化身なり。謂く諸の如来の成事智に由って変現したまえる無量の随類の化身なり。(弘大全一、三二六―七)

とある。唯識思想の中でも『唯識三十頌』に対する種種の意見があり、それをまとめたものが『成唯識論』であるが、弘法大師空海は法相宗の考えとして第六住心にこの『成唯識論』の文を引用している。弘法大師空海が、四種法身とする自性身・受用身・変化身・等流身の中、自性身・受用身・変化身の考えが述べられている。ここで身は、体・依・聚の意味をもつということである。法身は煩悩障と所知障の二障から離れていて、転依の果であり、清浄法界と大円鏡智等の四智が本性である。つまり法身は、転依の果すなわち智が基になっている。法身

の三相として自性身・受用身（自受用・他受用）・変化身がいわれる。この法身の三相は、如来が中心になって説かれる。そして自受用身は、常遍の色身であるという。『成唯識論』には、第一師の説として「五法の性を以て三身を摂しめば、有義は、初めの二には自性身を摂む。経に真如は是れ法身なりと説ける故に。論に阿頼耶識を転去して自性身を得し、円鏡智品は蔵識を転去して而も証得すと説ける故なり。二智品には受用身を摂む。・・・」（『新導成唯識論』四六四頁）とあり、第二師の説として「自性法身は、真実の無辺の功徳有りと雖も、而も無為なる故に色・心等の物とは説くべからず。四智品の中の真実の功徳と鏡智に起こされられたる常遍の色身とには、自受用を摂む」（『新導成唯識論』四六五頁）とある。第一師の説は、「阿頼耶識を転去して」自性身を得、「大円鏡智」は「蔵識を転去して」証得するという。そして「二智品には受用身を摂む」とあり、二智とは平等性智と妙観察智であり、この後の説明では平等性智は他受用身に、妙観察智は変化身にあてているところから察するに、大円鏡智は自受用身にあたる（『冠導増補成唯識論』では、第一師の説として、受用身を平等性智にあてる。巻十、二四丁左）。第二師の説では、真実の功徳と大円鏡智によって起こされるのが自受用身である。つまり『成唯識論』でも阿頼耶識によって展開する世界とその阿頼耶識が転依して智を依止とする世界が説かれ、自受用身は自性身すなわち真実の功徳と大円鏡智によって起こされた色身であるといわれる。

二、弘法大師空海の考える自性身・自受用身の説法

弘法大師空海は『弁顕密二教論』の中で『分別聖位経』を引用し、釈迦如来の経と得益、他受用身の説法得益、自性身・自受用身の説法と得益に分けて述べる（弘大全一、四九八―九）。また同じく『分別聖位経』の引用の後に「かくのごとき等は、並びに是れ自性自用理智法身の境なり。是の法身等は自受法楽の故に内証智の境界を

説きたまう」（弘大全一、四九七）とあり、自性身と自受用身の内証智の境界を説くことが、弘法大師空海のいう法身説法にあたる。

この『分別聖位経』を引用して、自受用身を述べるところをみると、『弁顕密二教論』には「自受用仏は、心従り無量の菩薩を流出す。皆同一性なり。謂わく金剛の性なり。遍照如来に対して灌頂の職位を受く。彼等の菩薩各の三密門を説いて、毘盧遮那及び一切如来に献じて、加持の教勅を請う・・」（弘大全一、四九八―九、四九七）とある。自受用仏は、心から無量の菩薩を流出し、その菩薩達は、それぞれの性が同じであり、金剛の性であるという。

また、『平城天皇灌頂文』では、この『分別聖位経』の文を引用し「法性身の仏は心従り無量の諸仏及び無量の菩薩を流出す・・」（弘大全二、一五五）とあり、それを釈して「此は法界体性身の大日如来、五智所成の四種法身金剛薩埵等の塵数の諸仏眷属と與に、或いは法界宮に住し、或いは普賢心殿等の中に住して、常恒不断に此の金剛一乗の真言秘蔵を演説したもう」（弘大全二、一五六）とある。この『分別聖位経』の文は、『弁顕密二教論』で「自性身・自受用身の説法と得益」を述べるとされる。

『弁顕密二教論』に引用された『分別聖位経』の文の「自受用仏」すなわち自受用身は、この『平城天皇灌頂文』では「法性身」とされ、「法界体性身の大日如来」とされる。あるいは、心より流出されるのが「無量の菩薩」であったが、この『平城天皇灌頂文』では「無量の諸仏及び無量の菩薩」となっている。

さて『弁顕密二教論』の中で「自受用仏」は「自性身・自受用仏」と解釈され、『平城天皇灌頂文』では自受用仏は法性身とされ、「法界体性身の大日如来」と解釈された。ただこの『平城天皇灌頂文』では「法界体性身の大日如来、五智所成の四種法身」とあるので、法界体性身の大日如来の他に五智があり、その五智によって成

ぜられた四種法身とするのか、あるいは法界体性身の大日如来が五智であり、それによって四種法身等が成ぜられるのかということがある。つまり唯識で考える前五識を転じて成所作智、第六意識を転じて妙観察智、第七識を転じて平等性智、第八識を転じて大円鏡智を得るのであり、この四智に法界体性智を加えて五智にするのであるが、法界体性智を大日如来にあてると、法界体性身である大日如来と五智の中の法界体性智にあたる大日如来の二種の大日如来が考えられる。

『成唯識論』では、五相すなわち成所作智等の四智と真如（清浄法界）と、煩悩障と所知障の転依の果とによって法身が説かれ、その法身の三相として自性身・自受用身・他受用身・変化身を述べる。その中、自性身は清浄法界にあたり、その清浄法界は「生も無く、滅も無く、変易も無し。故に説いて常となす」（『新導成唯識論』四二六頁）とあり、自性身は「謂く諸の如来の真浄の法界ぞ。受用と変化との平等の所依なり。相を離れたり。寂然なり。諸の戯論を絶たり。無辺際の真常の功徳を具せり。一切法平等の実性なり。」（『新導成唯識論』四二七頁）とある。自性身・受用身・変化身はそれぞれ如来が主語になって解釈されており、また自性身は清浄法界（真如）を基にしているが、清浄法界に対して無辺際の功徳を具えており、一切法の平等の実性であるというところが異なる。この清浄法界（真如）と自性身の異なりが、清浄法界身と清浄法界智の異なりであろう。そしてこの清浄法界身は、真如すなわち法身の内容の一部を指し、体・聚・依を意味し、働きをもたないが、如来を中心に説かれる法身の三相は、働きをもつ。つまり自性身は、「功徳を具す」という働きであるが、自性身が直接に動くことはない。

また、この『平城天皇灌頂文』の「法界体性」は、『即身成仏義』には「六大を説いて法界体性となしたもう」（弘大全一、五一二）とあり、六大を指す。この六大は、地水火風空と識とである。地水火風空の五大は、『大日

経疏』では、一切智智の性質と働きをあらわし、一切衆生を養育させ（大正蔵三九、五八五ｃ―五八六ｂ）、あるいは菩提心を養育する大悲（大正蔵三九、五八七ａ）とされる。既知のことであるが、弘法大師空海の思想は、『金剛頂経』とともに『大日経』そして『大日経疏』を基にしているので、次ぎに『大日経疏』を見ていきたい。

三、『大日経疏』に述べられる受用身

『大日経疏』は『大日経』の注釈書であるが、『金剛頂経』をも熟知し、『金剛頂経』の考えも入れて『大日経』を注釈している。その中で五成就の教主成就と処成就にあたるところを解釈して、すなわち

経に「薄伽梵如来加持に住す」と云うは、薄伽梵は即ち毘盧遮那本地法身なり。次ぎに如来と云うは、是れ仏の加持身、其の所住の処にして、仏の受用身と名づく。即ちこの身を以て、仏の加持住処とす。如来の心王は、諸仏の住にして、而も其の中に住したもう。既に遍一切処の加持力より生ず。即ち無相法身と無二無別なり。・・・」（大正蔵三九、五八〇ａ）

とあり、またこの加持住処は、

加持住処を釈歎するが故に、「広大金剛法界宮」という。「大」は謂く無辺際の故に、「広」は謂く不可数量の故に、「金剛」は実相智に喩う。・・「法界」とは、広大金剛の智体なり。此の智体とは、謂ゆる如来の実相智身なり。加持を以ての故に、即ち是れ真実の功徳に荘厳せらるる処の妙住の境、心王の所都なるが故に、宮と曰う。・・・今此の宗の明かす義は、自在加持神心の所宅なるを以ての故に、名づけて自在天王宮と曰う。謂わく、如来有応の処に随いて、此の宮に非ざるは無し、独り三界の表に在るにあらず」（大正蔵三九、五八〇ａ―ｂ）。

とある。この引用の部分は諸師によって種々の解釈がなされ、解釈によって加持身説法あるいは本地身説法のわかれるところである。

最初の引用文「薄伽梵住如来加持」であるが、薄伽梵は毘盧遮那本地法身とされる。「如来」は、仏加持身であり仏受用身とされるが、仏受用身とするときに、「其の所住の處にして」という条件がある。この「其の」が仏加持身を指すのか、あるいは毘盧遮那本地法身を指すのかが、考えられる。「其の」を毘盧遮那本地法身とすると、毘盧遮那本地法身が住するところが、仏の受用身となる。仏加持身とすると、この「加持身」は仏の「力の及ぶところ」と考えられ、毘盧遮那本地法身の力が及ぶところが「仏加持身」である。「仏加持身」は「仏の加持身」であるから、毘盧遮那の本地法身とは別に加持身が考えられ、本地法身は「力」を持たない、すなわち働きを持たないが毘盧遮那の住する場所をあらわし、加持身は、毘盧遮那の「力」を持つすなわち毘盧遮那の働きを持つ場所と「力」をあらわすと考えられる。如来すなわち仏受用身は、毘盧遮那本地法身のそれ自身の力が及ぶところと、毘盧遮那の本地法身に住し、本地法身とは別に毘盧遮那の力をあらわした加持身が考えられる。しかし、この加持身は本地法身に住しているので、本地法身を離れて存するのではない。

次ぎの「如来の心王は、諸仏の住にして、而も其の中に住したもう」は、如来の心王すなわち仏加持身である如来の心王に諸仏が住していて、また諸仏の中に如来の心王が住している。『大日経疏』はこの直後に「既に遍一切處の加持力從り生ず。即ち無相法身と無二無別なり」と続ける。「既に・・・從り生ず」であるが、主語がない。しかし前の文より考えると「諸仏」と思われる。そして「遍一切處の加持力」從り生ずるとある。この「遍一切處の加持力」は、毘盧遮那の本地法身と仏加持身（如来・仏受用身）と考えられ、「無相法身」は毘盧遮那の本地法身であろう。「既に遍一切處の加持力從り生ず」であるが、この前にある文では、仏の加持住處とし

て、如来の心王に諸仏が住し、諸仏に如来の心王が住しているという関係が述べられているだけである。そしてこの関係が「遍一切処の加持力」にあたる。

またこの「加持住處」を「広大金剛法界宮」という。このなかで「金剛」を実相智に喩え、また「法界」を「広大金剛の智体」であり、「智体」は「如来の実相智身」であるという。『大日経疏』は、「加持住處」すなわち「仏の受用身」を「広大金剛法界宮」であるとし、「金剛」を実相智にそして「法界」を如来の実相智身にしている。すると前の如来の心王に諸仏が住していて、諸仏に如来の心王が住しているということが法界であり、如来の実相智身である。そこには智という働きが加わり、この智が「遍一切處の加持力」であると考えられる。しかし、『大日経疏』は「薄伽梵如来加持に住す」の「如来」の解釈を「仏の加持身」とし、その加持身が住するところが仏の受用身であり、仏が中心になっている。いまの「広大金剛法界宮」は、「法界」が如来の実相智身であるというように、如来が中心になって解釈されている。

つまり、仏を中心に考えると〈如来の心王に諸仏が住し、諸仏に如来の心王が住している〉という関係が述べられ、如来を中心にして述べるときには〈智〉というはたらきが加わる。しかし如来は「仏の加持身」、あるいは「仏の受用身」といわれるように、毘盧遮那の加持身・受用身であり、本地身を離れてあるのではない。

また、加持住處である「広大金剛法界宮」は「如来有応の処に随いて、この宮に非ざるは無し、独り三界の表に在るにあらず」（大正蔵三九、五八〇b）とあり、加持住處は三界の中にあること述べている。

また、『大日経疏』には「加持受用身は、即ち毘盧遮那の遍一切身なり。遍一切身とは、即ち行者の平等智身なり」（大正蔵三九、五八三a）とある。前に遍一切處は本地法身であるといったが、ここでは加持受用身が遍一切身であり、行者の平等智身であるという。つまり加持受用身は、毘盧遮那の本地法身と同体であり、そして

如来が解釈されて仏加持身あるいは仏受用身とされたが、ここではそれが行者の平等智身と解釈される。
毘盧遮那と如来との関係は、毘盧遮那本地法身の住しているところが如来であるとされ、その如来が働きを持つ、つまり「智」とされる時に、仏加持身あるいは仏受用身とされた。そして如来すなわち仏加持身あるいは仏受用身を中心に据えて考えることによって、毘盧遮那身と行者の平等智身が同じであるとする。するとここに今まで仏の世界を述べていたのが、行者すなわち衆生の世界をも述べることになる。前の〈如来の心王に諸仏が住し、諸仏に如来の心王が住す〉という関係が、行者すなわち衆生に平等智身（如来）が住しているし、如来は行者（衆生）を住しているということになる。仏の世界や衆生の世界の差別が無く、衆生も如来すなわち平等智身とされる。それは「法界」の解釈で「如来の実相智身」とされたことに符合する。
この仏の世界と衆生の世界を、『成唯識論』では、転識得智の智の働く世界を法身とし、法身の相として自性身・受用身（自受用身・他受用身）・変化身をのべている。当然識の働く世界は有為であり、三界にあり、智の働く世界は三界を越えたところにある。『大日経疏』では、この智が働く世界は三界の中にある。
『成唯識論』では、受用身を自受用身と他受用身に分けて述べるが、『大日経疏』は、受用身とされ、加持身とされ、如来である。『成唯識論』でも、法身の相である三身を述べるのに如来を中心に述べている。しかし、智を基盤にした仏の世界と、識を基盤にした衆生の世界を分けて考えている。『大日経疏』は、すべてが如来すなわち智の働く世界である。

四、『大日経疏』の菩薩

『成唯識論』では、他受用身は菩薩を対象にするが、『大日経疏』では、菩薩は大眷属であるとしている。

次ぎに菩薩衆を列ぬるに、四聖者を以て而も上首とす。前に明す諸執金剛は、一向にこれ如来の金剛智印なり。今此の菩薩は、義として定慧を兼ね、また慈悲を兼ねたり。故に名を受く。亦これ毘盧遮那の内証の功徳なり。（大正蔵三九、五八二a―b）

『大日経疏』では、十九執金剛を述べた後で、四大菩薩を解釈するが、この執金剛は如来の金剛智印とされる。それは別の箇所では、「今心王の毘盧遮那は、自然覚を成ず。その時に、一切の心数は、即ち金剛界の中に入りて、如来内証の功徳の差別智印と成らずと云うことなし」（大正蔵三九、五八〇b）とあり、執金剛は心王毘盧遮那の心数であり、心数は、如来内証の功徳の差別智印である。菩薩は毘盧遮那の内証の功徳である。また執金剛は内眷属とされ、菩薩は大眷属とされる。この執金剛と菩薩は「今謂く仏の加持身も亦復かくの如し。諸の執金剛は、各各に如来の密印を持するをもって内眷属と名づけ、諸の菩薩は、大悲方便をもって、普門に無量の衆生を摂受し、法王を補佐して如来の事を行ずるをば、大眷属と名づく」（大正蔵三九、五八二b）とあり、執金剛は如来の智印であり、毘盧遮那の内証の功徳である菩薩は、大悲と方便を持ち、無量の衆生を済度し、毘盧遮那を補佐して、如来の事を行ずる。

『成唯識論』では、他受用身は菩薩に説法する法身として考えられているが、『大日経疏』では、他受用身は説かれない。菩薩は毘盧遮那の内証の功徳であり、大眷属であり、大悲と方便を持ち、無量の衆生を済度するという如来の事を行ずるという。

しかし、これは毘盧遮那の心王と心数の関係を述べていて身の問題ではない。身が述べられるのは「身無尽荘厳蔵」においてである。

「時に彼の菩薩には、普賢を上首とし、諸執金剛には、秘密主を上首とす。毘盧遮那如来加持の故に、身無

尽荘厳蔵を奮迅示現したまう。乃至、有情類の業寿の種を除きて、復牙種の生起することあり」とは、謂く将に此の平等の法門を説かんとするが故に、先づ自在加持を以て、大衆を感動して、悉く普門の境界たる秘密荘厳の不可思議未曾有の事を現ず。（大正蔵三九、五三八a—b）

毘盧遮那は如来の加持によって身無尽荘厳蔵を示現するという。さらに

復次ぎに普賢秘密主等の上首の諸の仁者は、即ち毘盧遮那の差別智身なり。是の如くの境界に於いて、久しく已に通達せり。然も此の諸の解脱門より現わる所の諸の善知識は、各の無量当機の衆を引いて、法界曼荼羅に入れしむ。（大正蔵三九、五八三b）

とある。前には毘盧遮那（心王）の心数あるいは如来内証の功徳、そして毘盧遮那の差別智印とされた執金剛や菩薩は、法界曼荼羅が説かれることによって毘盧遮那の差別智身となる。曼荼羅が導入されると智印（心）が身にかわるのである。身無尽荘厳蔵は、「普門の境界たる秘密荘厳の不可思議未曾有の事」であり、「法界曼荼羅」である。「普門の境界たる秘密荘厳の不可思議未曾有の事」は、毘盧遮那が自在加持によって現じたのであり、「法界曼荼羅」は、諸の善知識（菩薩）に引かれて無量の衆生が入るところである。

そこで如来すなわち仏加持身は、どのように考えられるのであろうか。毘盧遮那は、無相法身であるが、この無相法身の毘盧遮那と如来の加持（仏の加持身）によって身無尽荘厳蔵を示現するのであるから、無相法身の毘盧遮那が無尽荘厳蔵（法界曼荼羅）を示現するには、如来の加持（仏加持身）が必要なのである。

五、弘法大師空海が考える受用身

『大日経疏』では、『大日経』で説かれる如来を仏加持身あるいは仏受用身とされた。弘法大師空海は『秘密

曼荼羅十住心論』（以下『十住心論』）の巻第十に『大日経』の「一時薄伽梵住如来加持広大金剛法界宮。一切持金剛者皆悉集会」を解釈している（弘大全一、四〇〇―四〇二）。そこには、「此は総じて大秘密究竟心王如来大毘盧遮那五智四印及び心数微塵数の眷属を明かす」（弘大全一、四〇〇―四〇一）とある。この文全体が毘盧遮那の究極的な世界であることを述べている。そして

薄伽梵とは、総じて塵数の諸尊の徳号を挙ぐ。具さに釈すること『疏』の如し。住とは能所の二住を顕す。言く、各各の諸尊、自証の三昧の句に住するなり（弘大全一、四〇一）。

とある。『大日経疏』で「薄伽梵」は、毘盧遮那の本地法身とされた。弘法大師は「薄伽梵」は、塵数の諸尊の徳号であるという。この世界にある塵のように無数に隙間がなく住している諸尊の徳の名前が、薄伽梵である。この塵数の諸尊が「毘盧遮那の本地法身」である。住は能所の二住とされている。『大日経疏』では毘盧遮那本地法身が、つまり「能住」が毘盧遮那本地法身である。それに対して如来は仏加持身あるいは仏受用身とされ、毘盧遮那本地法身が住するところ、「所住」にあたる。これを弘法大師は、「各各の諸尊、自証の三昧の句に住する」と解釈する。諸尊はそれぞれ毘盧遮那の自内証の境界に、三昧によってあるいは自内証そのものが三昧の世界でもあるが、その毘盧遮那の自内証の境界に、それぞれ諸尊の住処があり、その住処に諸尊が住することを「住」という。次ぎに

如来加持広大金剛法界宮とは、則ち五仏の異名なり。大日・宝幢・開敷・彌陀・天鼓、次の如く配せよ。復次ぎに如来とは大曼荼羅身なり。下の文に説く所の胎蔵曼荼羅これなり（弘大全一、四〇一）。

とある。『大日経疏』は、「如来加持」と「広大金剛法界宮」とを分けて解釈した。如来は、仏加持身あるいは仏受用身とされ、如来を中心に考えると、如来を衆生の平等智身と解釈し、仏のみではなく衆生をも含む「広大金

剛法界宮」という住処を考えた。弘法大師空海は「如来加持広大金剛法界宮」を五仏の異名とし、大日・宝幢・開敷・彌陀・天鼓の如来とした。さらに如来を大曼荼羅身とし、胎蔵曼荼羅であるという。続けて「金剛」を三昧耶身、「法界」を達磨曼荼羅身、「加持」を大曼荼羅身・三昧耶身・達磨曼荼羅身に通ずとし、「宮」を次ぎのように解釈する。

宮と言っぱ、所住処なることを顕す。今此の心王の如来、無始無終にして各各に自法界三昧に安住せり。故に下の文に云く。時に薄伽梵大日如来広大法界加持を以て、即ち是の時に於いて、法界胎蔵三昧に住して、入仏三昧耶を説きたまう（弘大全一、四〇一）。

「所住処」は、『大日経疏』が解釈するように毘盧遮那が住するところであろう。次ぎの「此の心王の如来」であるが、「此の」は、大・三・法・羯の四種の曼荼羅を指すと考えられる。すると「心王の如来」とは、四種の曼荼羅を指す。『大日経疏』では、心王である毘盧遮那と、その心王が住するところとして仏受用身、そして心王の働きを仏加持身として如来を考えていた。そして「如来の心王」として、諸仏と対比させ、さらに如来を「行者の平等智身」とし、如来を中心に見ていたが、弘法大師空海は「心王の如来」とし、毘盧遮那を中心に、そして『大日経疏』で仏加持身・仏受用身と解釈された如来の、その内容を毘盧遮那に含め、すなわち心王に仏加持身あるいは仏受用身を含めて考えた。次ぎの「下の文」であるが、これは『大日経』からの引用文である。『大日経』では「時薄伽梵広大法界加持。即於是時。住法界胎蔵三昧。従此定起説。入仏三昧耶持明曰」（大正蔵一八、一二c）とある。「大日如来」の語が挿入されて、「従此定起説」が抜かれている。ここで「大日如来」の語を挿入するには、弘法大師空海の意図があったと思われる。つまり毘盧遮那と如来の、『大日経疏』の毘盧遮那本地法身と仏加持身・仏受用身の両方の意味を表そうとしている。「従此定起説」を抜いたのも、当然意図があ

る。弘法大師空海は、大日如来が法界胎蔵三昧に住したままで、入仏三昧耶の持明を説いたと解釈したのである。大日如来が、法界胎蔵三昧という定から起たないで、そのままで法（入仏三昧耶の持明）を説いたのである。弘法大師空海はこの世界あらゆる世界が法界胎蔵三昧の世界であり、大日如来が説法していると考えた。

六、まとめ

弘法大師空海は、自性身と自受用身の説法を、法身説法とした。また一方では『即身成仏義』に「六大能く四種法身と曼荼羅と及び三種世間とを生ずることを表す」とあり、自性身等の四種法身は、六大から生じたものである。あるいは『弁顕密二教論』の『瑜祇経』の序品の引用文の「五智所成の四種法身を以て」（弘大全一、五〇〇、大正蔵一八、二五四ａ）とあり、五智によって成ぜられた四種法身である。しかし弘法大師空海が考えた自性身と自受用身の説法は、『金剛頂経』を基にしているし、また『大日経』の注釈書である『大日経疏』に説かれる毘盧遮那如来すなわち毘盧遮那本地法身と仏加持身・仏受用身を基にし、毘盧遮那の自内証の境界を説いたもので、その世界が六大あるいは五智として述べられている。これは『弁顕密二教論』の『瑜祇経』の序品の引用文に

自性所成の眷属金剛手等の十六大菩薩及び四摂行の天女使、八供養の金剛天女使と與なり。各各に本誓加持を以て自ら金剛月輪に住し、本三摩地幖幟を持せり。皆微細法身秘密心地の十地を超過せる身語心の金剛なり（弘大全一、五〇〇、大正蔵一八、二五四ａ）。

とあり、割注で「これは三十七の根本、自性法身の内眷属智を明かす」と言っている。『金剛頂経』で説れる三十七尊の根本である自性法身の内眷属智であるという。これは三十七尊全体が自性身であり、金剛手や十六大菩

薩等は自性身すなわち五智によって成せられたのであるが、それぞれが本誓加持によって自ら金剛の月輪に住し、本三摩地の標幟をもっている。この自性身と金剛手や菩薩等の関係は、『大日経疏』で言われた毘盧遮那と、毘盧遮那の智印である執金剛や菩薩すなわち毘盧遮那の徳との関係である。これが毘盧遮那の自内証の境界である。そして弘法大師空海が自性身自受用身の説法と言うときの自性身と自受用身はこの毘盧遮那の本地法身と仏加持身・仏受用身の関係をいう。

〈キーワード〉法身、如来、受用身、加持身、菩薩